美術部会（中学校）

県研究主題
豊かに感じ取る力を高めることを重視し、生徒一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　竹内　美穂（相模原地区）

＜研究主題＞
生活の中の美術の働きを理解する学習や、形や色、材料などを生かして、自分の気もちを心豊かに表現したり、伝えたい内容などを他者や社会にむけて表現したりする題材開発及び指導と評価の工夫

１　提案内容

研究テーマは「生活を美しく豊かにする造形や美術を感じ取る力を高める～身近な生活の中にあるものを題材として～」である。生活の中にあふれる美術を感じ取るための授業をきっかけとして、生活を美しく豊かにする美術の力を感じさせるような指導の工夫を行った。

（１）年間計画の工夫

学校行事や季節に合わせた題材を年間計画に取り入れることで、身近な生活と結び付きやすくなり、より生活を美しく豊かにする造形や美術を感じられるようになるのではないか。

①１学年…美術との出会いの学年であるため、何を学ぶのか、ねらいをわかりやすいよう意識して題材選びを行うように心がけている。自分の周りには美術があふれていると実感するところから、様々なものの中にあるよさや美を感じ取ることができるきっかけにしたい。

〇実践例「よく見て描く」

煮干しと学校内にある自然物（落ち葉など）をモチーフとして、鉛筆デッサンを行った。身近にあるものをよく見てデッサンすることを通して、いままで気付かなかった美しさを発見することをねらいとした。

②２学年…美術の学びが深まってくるので、時間をかけて取り組めるような題材を選び、学校生活等に関わる内容から生活を豊かにする美の力を感じ取らせたい。

〇実践例「絵手紙」

季節を感じる絵手紙を制作し、筆の表現のよさや味わいを楽しむ。裏面には三者面談時に来校された保護者への感謝の手紙を書くことで、思いを伝えることのよさも取り入れた。

③３学年…卒業後、生活と美術がどのように関わり、学んだことをどのように生かせるのか、授業を通して身近に感じさせたい。

〇実践例「修学旅行リーフレット」

修学旅行の事後学習として総合的な学習の時間とタイアップし、京都奈良の紹介リーフレットを制作した。日本らしい装飾とは何かを考える。また、読み手をしぼって制作し、相手のことを考えたデザインやレイアウトを工夫する。

（２）主題を意識した授業づくり

〇実践例「文字で伝えるわたしのイメージ」

文字の形や色の工夫がもたらす効果を意識して授業展開を考えた。３年間使用するクロッキーブックにレタリングを用いて装飾的な記名を施すことで身の回りのものをよりよく、美しくする美術の力を実感できるのではないかと考えた。

（３）研究の成果と課題

① 成果　生徒自身が達成感を味わうだけでなく、作品を受け取る側からの反応が返ってくる喜びを感じたり、鑑賞後の作品の捉え方が変化したりすることから、生活の中で造形によって豊かになった瞬間を感じることができていた。

② 課題　授業を通して生活を豊かにする美術の力はある程度実感できていたと考えられる。しかし、本当に力が高まった状態とは日常でも造形や美術がもたらす生活への豊かな働きを感じ続けられることであると考え、授業の時には、教員が十分な知識と確かな手段、具体的な手立てを数多く用意しておくことが課題である。

２　協議内容

・時間数が少なくなっているので、作品を小さいサイズにしたり、鑑賞の時間を１時間にしたりすることで多くの題材を計画的に実践している。

・日常生活の中にある美しさについて取り組んでいることが素晴らしい。特に色と美の調和だけでなく、機能と美しさのバランスについても指導に取り入れると、もっとより内容が深まるのではないか。

・デッサンの授業で技術的に教え込むことと、主題を生み出すこととのバランスが難しいのではないかと思う。

・レタリングは技能を教える時間を設定することで、文字の美しさに着目させることができた。

・色鉛筆は時間的に扱いやすく、ハッチングや重色の技能を教えることで表現の幅が広がる。

・美しいものは身近なものでもあり、表現するための遠い存在でもあるとも感じている。生徒の技能が表現したいものに追いつくために努力させることにも学びがあるのではないか。

・生徒の思いに応えるために個々に対応し、表現の力を伸ばせるように指導を工夫している。

３　まとめ

○助言者・グループ協議より

研究テーマについて、生活の身近に考えられることはとても大切なこと。専門家の美術表現と生徒が獲得するべき美術の力は違う。私たちが目指すものは美術が生活に根付いて身近なものであることをもっと指導するべきなのではないかと思う。

それぞれの授業については、「煮干」はデッサンというより、身近にあるものを描き感じ取る力を育成するためのスケッチなのではないかと思う。生徒全員が同じ表現にならないように技術の習得も含め、中学生のときに簡単なスケッチができるようになることは大切。また、絵手紙等を通して、保護者への思いを伝えることは美術の授業が家庭に伝わるよいきっかけになると思う。ストップモーションアニメは、学習指導要領でも映像や写真を扱うことが大切だと記載されているので、これからさらに発展がおもしろい内容である。活動があって中身がなくならないように生徒の状況をよく見て計画を立て、ねらいをもって授業を展開することが大切。

生徒の学びを達成させるためには、教員との信頼関係づくり、学べる環境設定の準備、表現技法の経験を増やすこと、見通しをもたせた授業展開の工夫、適切な時期の評価方法など、様々な手立てが必要だと考えられる。生徒たちにとって生活の中の美術の働きを理解できるような表現や鑑賞の学習を、計画的に実践することが、これからはより大切ではないだろうか。

提案２　　提案者　中村　紀章(湘南三浦地区)

＜研究主題＞
『自分の中身・成長を感じる』
～意欲の高まりを目指し、自分を表現する～

１　提案内容

中学校最初の美術の授業で生徒に話を聞くと、毎年「つくること」は好きで楽しいが、「描くこと」に対し苦手意識をもっている生徒が多い。生徒の様子から原因を探ったところ「思い通りに上手に表現できない」からではないかという仮説を立てた。

そこで、**「思い通りに表現できる技術を身に付ける」**
→ **「よく見て考えをもち、思うように表現したい」**
→ **「思いをもち、深く考え、表現してみよう」**
→ **「人にどう言われるかではなく、自分では思った通りに表現できた」**
と思えるような３年間の学習計画を立てた。

（１）実践概要　　３年間の学習計画・３年間の計画の趣旨

（２）授業実践

※授業での決めごとや方針
・取り組み方（話は静かに聞く、仲間との教え合い、学び合い）
・座席等の配置（学び合ったり、教え合ったり、鑑賞しやすいような工夫）

①授業実践１（第３学年までに育てたい力）

◎第１学年「デッサン：上履き」

「思い通りに表現できる技術を身に付ける」ようになるために、すべての描くことの基本になるデッサンを１年で学ぶ。表現の仕方や物を深く見つめてテーマを自分で設定する力を身に付けさせる。描く対象は身近で見慣れている上履き。人により足の形や履き皺等の個性が出しやすいものにした。

◎第２学年「名画を鑑賞～特徴・好きな印象を描く～学校の風景画」

「よく見て考えをもち、思うように表現をしたい」→「思いをもち、深く考え、表現してみよう」となるように、１年時の最後に、著名な名画を鑑賞し自分の好きなところを探し、２年時ではそれを模写することを通じて、特徴を捉えたり、表したい感じを探したり、色彩の効果を生かしたりしながら表現する。さらに学んだ知識・技能を生かし、学校を見つめることで、自分の感情を表現し追求する。

①授業実践２（総合的に「自分」を表現する）

◎第３学年「『成長した自分』～パステルでモチーフに自分を表す～」

第３学年のこの時期では、デッサンのような描き方や、著名な絵画を描いたときに身に付けた色彩表現や色のもたらす効果・仕組みをもとに、パステルで自分をとことん描いて自らが発想したテーマを描き上げさせたい。「自らの表現をする」ということの集大成として、高い意欲で生徒が満足できる作品を作り上げて欲しい。

（３）成果と課題

【成果】

表現・鑑賞の中で段々自分の思うことを表現するようになってきていると感じる。

「思いをもち、深く考え、表現してみよう」と考えている生徒の声が増えてきた。それは基

本的な技能や題材の趣旨の理解、３年間の授業の活動の流れの中で、主体的に主題決めや、それを深める構想を自分なりに工夫してイメージしながら表現してみようと考えることができているからである。第１学年の始めに３年間の指導目標として掲げた。

「人にどう言われるかではなく、自分では思った通りに表現できた」ことを感じられる生徒が第１学年の頃より確実に増えてきている。さらに多くの生徒にそう感じさせたい。

【課題】

他者のよさを学ぶ姿勢や発想を膨らませることが苦手な生徒もまだいる。そうした生徒の多くは「描くこと」の基本的な表現力が十分身に付いていないことで自信がもてず、周りにサポートを求められない、学び合うことが十分でないことが、日常授業の様子の観察から伺える。「自分を表現すること」を追求した課題設定・年間計画だが、「描くこと」でそれを表現することに特化しすぎてしまったと思う。小学校時に「つくること」が大好きだった生徒が多いことを生かし、「つくる活動」とも上手くリンクさせ、「描くこと」に苦手意識がある生徒にも美術の楽しさや自分らしく表現することの素晴らしさや達成感を味わわせたい。また、題材の開発だけでなく、指導法や授業の展開の仕方も見直さなければならないと感じた。

２　協議内容

・授業実践２（総合的に「自分」を表現する）の描画材料になぜパステルを選んだのか。

→ 素描のように描け、着彩もできるというパステルで表現させたかった。

・主題を明確にしていることが素晴らしい。年間計画を見ると「描写」にこだわっている。

→ 今後の課題に繋がっている。

・わかりやすい授業だった。第２学年での名画の模写は生徒が自由に選んでいるのか。教員が選抜して選ばせているのか。

→ 教科書、資料集の中からという設定で選ばせている。

・パステルはどう用意しているのか。

→ ハーフサイズ 12 色をひとり１セット用意している。

・座席、ワークシートなど、よく工夫して授業を展開している。パステルがよかったという生徒の感想からも、何を選んで何を展開していくかが大切だと思う。

・３年間の学習計画を見ると「ポスター」を全学年でやっている。同じ題材を取り組むというのは、生徒の成長がよく見られ、とてもいい。

・主題設定の理由に４つのステップがあるが、ステップアップしにくい生徒には、どんな手立てをしているのか。

→ １年生の４月から、周りの生徒と自然に作品を見せ合える関係づくりに力を入れている。

３　まとめ

美術は答えがひとつでなくいろいろあるところがよい。生徒の発想力を育てる仕掛けがいっぱいある授業が求められる。「オムライス」を例として、つくり方を説明するのではなく材料を示して考えさせ「オムライス」をイメージさせる。発想が広がる手立てを工夫することが大切。

美術の学びのよいところ
- 生徒がもともともっている感性を生かして学ぶ。
- 教えてもらって学ぶ。

ゴールがすでに指導者の頭の中にあるというのでは生徒の発想が広がらない。生徒自身が答えをつくっていくことが大切。想像の過程にたくさんの発見と学びがある。作品のよし悪しを評価するのではなく、制作のプロセスを見て評価するために手立てを工夫することが大切である。